
妖の世界 女主人公側

霜月サヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖の世界 女主人公側

【Nコード】

N2036BA

【作者名】

霜月サヤ

【あらすじ】

忘れてはいけない前世の記憶…そして現在…少女は何を想う

もう一つの『妖の世界 男主人公側』と平行して読むと、より楽しめます。

また、この作品はサイトに掲載されているものです。感想ありましたら、よろしく願います。

はじめに(前書き)

まずは読んでください

はじめに

こちら『妖の世界 女主人公側』では、女主人公をメインに話が進んでいきます。

なので、もう1つの『妖の世界 男主人公側』と平行して読むと、より楽しめます。

また、この作品は名前変換機能を利用できる場所にて、作者が書いているものと同じです。

ベースは『ぬらりひよんの孫』ですが、他作品が交わります（主に、魔法系）。

女主人公側では、リクオとの恋愛要素が入ることがあります。

ので、そういったのが苦手という人は読まない方がいいです。

設定（前書き）

『妖の世界 男主人公側』と共通です

設定

女主人公

名前：櫻井 有紀

通称：ユキ

年齢：12歳（中学1年生）

誕生日：12月02日

髪色：黒

目の色：黒

一人称：私

口調：乱暴な言葉遣いはしない。だけど、怒ると変わる。
服装：学校や外に出かける以外は、普段着物。

呼び方

・光輝 お兄様、コウ兄様

・両親 お父様、お母様

・リクオ 小学時代は奴良君、リクオ君

・ゆら 花開院さん

男主人公

名前：櫻井 光輝

通称：コウ

年齢：15歳（高校1年生）

誕生日：10月02日

髪色：銀

目の色：銀

一人称：俺

口調：時と場所を考えて、変えて話す。

服装：普段は着流し。羽織の色は、象徴の水色にしている。

備考：櫻井家の現当主であるが、学校にはアルバイトと偽って、学校側に話している。

呼び方

・有紀 ユキ

・両親 父上、母上

・リクオ リクオ

・ゆら 陰陽師、陰陽少女

その他

・父親

銀の髪で銀の目。まだまだ若く見られる。櫻井家の前当主。

・母親

黒髪黒目。外見と実年齢が釣り合わないじゃないかってくらいの美人。

・祖父

すでに他界している。

櫻井家の中では、異例の長寿だった人物らしい。また、過去にも詳しくかった。

・シロ

光輝の使い生物。

どんな生物なのかは、依然謎で、喋ったり飛ぶことができる。

・クロ

有紀の使い生物。

シロと同じだが、体の色がちょっと濃い。

・彼女

櫻井家当主の部下。

得意分野が情報収集のため、主な仕事は情報収集の活動である。
名前は、愛梨^{あじな}峻。

第零章（前書き）

小学校時代です

第零章

忘れてはならない

我が一族の血がどんなのかを

忘れるな

第零章

「光輝様〜、有紀様〜！お時間ですよ〜」

朝はいつも騒がしい。

お手伝いさんが言っている“お時間”は、朝食、学校のこと。

「ふあああ、眠い……」

だけど、これがいつもの日常。

私は眠気を噛み殺しながら、部屋の外に出る。

「「おはようございます、有紀様」

「うん、おはよう」

「おはよう、ユキ」

「あ、コウにいさま〜!」

私のおにいさまがやって来た。

「挨拶は？」

「あ…おはようございます、おはようございます」

「よし、行くか」

「…えい」

「おはようございます、父、母」

「おはようございます、おとうさま、おかあさま」

「あ、おはよう」

「おはよう、ひ、ひキ」

「朝食でございます」

お手伝いさんの声で、私たちの朝食が始まる。

「「いただきます」

気持ちがいくらい、綺麗に八モった。

朝食が食べ終わり、学校に行く。

「それでは、行ってきます」

「行ってきます！」

それが、いつもの日常である。

第一章（前書き）

原作1話分な為、めっちゃ長いです

第一章

ああ、はじめまして

でも、貴方は覚えていないのね

でもね　いつか、きっと

第一章

「おにいさま、今日は遅いのですか？」

「ん？…いや、今日は遅くない。一緒に帰れるよ」

「やった〜！」

私は大きく喜ぶ。

しばらくし、バスはやって来た。

「おはよう、カナちゃん、奴良君」

次に止まったバス停から入ってきた二人に挨拶をする。

「おはよう、ユキちゃん」

「おはよう」

二人はコウにいさまには挨拶をしない。というよりも、おにいさまが既に、持参している本を読んでいるため、挨拶ができないって言った方が正しいかも知れないが。

「わー、すっごい大きな家」

「奴良君ち？うっそー」

前方の席に座っている子達が、奴良君の家を見て言っている。

「（確か、奴良君の家は、妖怪一家でもあるんだよね）」

一度、櫻井家の一族として訪れた記憶がある。

それにしても、おにいさまは相変わらず次期当主として、移動中でも勉強しております。

「こうして、子を喰うおそろしい“妖怪”は、陰陽の美剣士によって退治され、それが鎮社ちんしゃされたのが今の璞神社めいじんといわれています！以上、私たちの班は郷土の伝説をまとめました」

パチパチ

みんなが関心している中、一人だけ、ポカーンとしている人がいる。

それが、奴良君こと、奴良リクオ。

「こっわー。妖怪伝説だつて」

「このあたりに昔出たんだと」

「いやー」

「先生ー、今のは何点の出来ですか？」

みんながワイワイとしている中、清継が先生に聞いた。

「満点よ」

「さっすが、清継くん！」

「えっ」

そんな中、一人納得していない人がいた。

「ちょ…ちょっと待って！！今の話、おかしくない？」

そう、奴良リクオであった。

「妖怪って、いい奴らだよ！」

シーン、とする。

「（あーあ、これはちょっとヤバいかも…）」

そして有紀が思っている通りになる。

「え」

「な…何？」

「そりゃ…たしかにドジばかりだけど…。青田坊は力持ちだし、雪女の料理は冷めてるけどうまいんだ」

リクオが一生懸命、弁解をする。

「え…何言っているの、この子…」

「こいつ、さっきから変なんだよ……」

当然、戸惑いだすみんな。しまいには、

「おめー何だよ！！清継くんの作った自由研究にケチつけよーって
のか！！」

「え！？」

それに対するリクオは

「ホントだつて！！ボクのおじーちゃんはあ！妖怪の総大将なんだ
から！！」

「リクオ君？」

「ホー！じゃあ君のおじいちゃんは“ぬらりひょん”じゃあないの

かい？」

清継が言う。

「！？そー！よく知っているね！？有名なの？」

リクオが清継を指して聞く。

「おバカ：“ぬらりひよん”ってのはなあ〜

人の家上がりこんで、勝手にメシを食ったり、わざと人の嫌がることをやって困らせたりする、すっごい『小悪党』な妖怪だろっが！何を英雄ヒーローみたいに言ってるの？」

「えー、そんな奴いやだよー」

「キモーイ」

そのことを聞いたみんなは、そんなことを言う。

「（まあ確かに、“現在”いまはそんな感じのをやっているらしいけど）

有紀は、櫻井家代々から残されている書物に書かれていることと、
現在いまを比べてみる。

「ハハ…でもみんな安心して！

妖怪なんてのは、昔の人が作った創作だから！

この現代に出るわけないしね！」

「そっかー。さすが清継くん！」

「实际いたら怖いしね！」

「ねー」

「ちよっ…ちよっと待って！！

でも…でも…ボクんちに」

「しっつこいわね 奴良！！アンタ、マジキモいんだけど」

「ガキくさいんだよ！！

清継くんのどーよこの大人な会話！！」

「妖怪とか……いるわけないじゃん!？」

それらの言葉には、私自身、黙ってはいられなかった。

「ホントにそうかな？」

「え、何!？」

「いるとか、いないとか、そんなこと、人それぞれじゃないの!？
それなのに、人それぞれの考え方を否定できるほど、あなたたちは
偉い人間なわけ!？」

語尾はキレ気味になった。

「ユキちゃん……」

少し、ガアアンとしていたリクオの顔に元気が戻っていた。それでも、シヨックは抜けていなかった。

「……先生」

「は、はい」

「私、気分悪いので、保健室に行きます」

「わ、わかったわ」

そのまま有紀は、教室を出た。

保健室に行けば、丁度誰もいなかった。

「（おにいさま…コウにいさま…）」

胸元にあるペンダントを握って、兄に話しかける。

『（）どうした、ユキ？（）』

何度か話しかければ、兄の返答があった。

「（自由研究の授業で、ちょっと気分が悪くなることがあったので、本日は保健室にあります）」

『（そうか…わかった。放課後、迎えに行くよ）』

「（ありがとうございます、おにさま）」

会話が終わると同時に、保健室の先生が入ってきた。

「あら、櫻井さん。どうしたの？」

「ちょっと、気分が悪くなってしまったんです」

「そう。ゆっくり休んでね」

「はい、先生」

放課後になるまで私は、保健室で休んだ。

放課後

「ユキ、迎えに来たよ」

「あ、おにいさま!」

「全く…、訳を聞くからな」

困ったように言う兄。

「はい…」

もちろん、私の返答はYESだけである。

「……なるほどな」

保健室に行くことになった経緯をコウにいさまに話すと、おにいさまは納得したように頷いた。

「……タイミングが悪すぎる……」

おにいさまが呟いた、その言葉の意味をその時はわからなかった。

「「ただいま」

「お帰りなさいませ、光輝様、有紀様」

「父上は、いつものところにいるだろ？」

「はい」

「じゃあ、ユキ」

「なんですか？」

「俺は、父上のところに行くから」

「わかりました」

今、私は縁側に座っている。

確か今日、おとうさまとコウにいさまは、奴良組のところに行くらしい。なんでも、総会のためらしいけど。

おにいさまも行くのは、次期当主として慣れさせるためだと思うけど。

「ユキ」

「あ、おかあさま」

「今日は、二人とも遅いから、アナタは寝なさい」

「はい、おやすみなさい」

「おやすみ、ユキ」

そのまま私は、自分の部屋へ戻った。

布団の中に入っても、すぐに寝れるわけでもなく…。
なんとか寝ようと努力をしながら、眠りについた。

今日もおにいさまと一緒にいる。それは、とても珍しい。だから、思わず聞いてしまった。

「おにいさま、今日も一緒に帰るのですか？」

「ああ、というより、今日は気になることが起こりそうなんだ」

おにいさまが気になることとはなんだろうか…？

「あ、アレは…」

私が指したのは、リクオとカナの姿だった。

カナは、バスへ向かっていった。

「奴良君！」

メソメソしている奴良君をちょっと、驚かせたかった。

「うわぁっ」

奴良君は驚き声を上げた。

「さすがに後ろから声をかければ、誰だって驚くだろ、ユキ」

「エへへ…。」

奴良君は、バス乗らないの？」

「乗らないよ」

乗らないと、意地を張るリクオ。

「お前、昨日のこと、まだ引きずっているのか？」

おにいさまが言っている昨日は、私が知っている昨日の出来事ではないことは確かだろう。

「……」

「まあいい。昨日、俺が言ったこと忘れるなよ」

「おにいさまが何を言ったのか、ご存知ではありませんが、無理しないで下さいね」

「じゃあな」

「では」

そのまま私たちは、バスへ向かったのだった。

後ろの席に座っているカナとその隣の子が話をしていた。

「ね……ね……奴良君じゃないけど……あの伝説って……続いているらしいよ」
「」

「え……何が……」

「だから…妖怪ー？
何人も子供が神隠しにあっただって！
ちようど…このあたりで…」

「や、やめてよ〜」

その会話を聞いていた私は、そつと兄を見る。

兄の表情は、一段と険しくなっていた。どうやら兄には、この仕業
が誰かがわかつているらしい。

「おい！！君たち！！待ちたまえ！！
妖怪など実際にはいない！！ボクが研究で…」

「！！すぐに、背を下げるッ！！」

おにいさまが声を張り上げた。その後、小さな声で、衝撃が来る、
と言った。

「キヤアアア…」

コウにいさまが声を張り上げた後すぐに、バスに衝撃が走った。

「…………ユキ…………ユキ、大丈夫か？」

「う…………お、にいさま…？」

目を開ければ、心配しているおにいさまの顔が見れた。

「腕…、出して」

「腕？」

「血、出ている。治すから」

「おにいさまがやらなくても、私自身が…」

「お前だと、敵にバレる。お前はまだ、血の力加減が不安定だ。だから、俺がやってやる」

「はい…」

有紀は素直に、光輝に腕を出した。

光輝は、有紀の血が出ている箇所を手をかざした。

すると、ポウっと光り、有紀の傷を治していった。

「ふう、さて、俺が乗っているのを知っていた、知らなかったに
関わらず、あの妖怪には懲らしめないとな」

「お、おにいさま…?」

「ユキは、気にするな」

「(いえ、とっても気になってしまいます)」

それにしても、あのおにいさまがキレてしまった。

これは、止められない。

「キャッー!!」

「い、家長くん!?
ビックリするじゃあないか…」

「だ…だつて…
そこに…人が…並んでたから…」

「人？」

島が懐中電灯を照らす。

「な…なんか…、おかしくないか…?」

「清継くん…アレ何…?」

「え…さ、さあねえ…」

戸惑う三人。

「ち…けっこう生き残ってんじゃねーか」

「ヒッ!？」

「ど…どなたさまですかあー！？」

怖がる三人。

「あんまりトンネルがこわれなかったようだな…
とにかく…ここにいる全員…『皆殺し』じゃ。
若、もろともな…ガガガ…」

ガゴゼが言った。

「ひ…」

「ああ…「うちへ…」」

「よ、妖怪…………ツ」

清継が遂に叫んだ。

「ふーん、そういふこと」

「だ、誰…?」

「だけど、お前ら。若狙いだっただとしても、俺がいたことを忘れて
いるなんて、余程死にてえーのか？」

「あ、ユキちゃんのお兄さん…」

「アヤツを殺れー!」

「……バカが」

光輝は、刀を振る。

光輝へ向かっていたガゴゼの手下は、一瞬にして消えた。

その時だった。

音をたてて入ってきたのは、奴良組本家の妖怪たちだった。

「！？」

「おほ……… 見つけましたぜ、若ア。
生きてるみたいですねー」

「……………」

光輝は、胸元にあるペンダントを触り、刀をしまった。

「…………… ガゴゼ、貴様……なぜそこにいる？」

中央にいる少年が問う。

「ガ……ガゴゼさま……」

「本家の奴らめ……」

「……… 今度は何ー？」

「そ…そんな…こんなあ…」

「なんだよー、清継くんー」

「わ…わからん…」。

「こんなの…何かの間違いだあー！！！」

「うるさい、静かにしろ」

一刀両断に言う、光輝。不機嫌はMAXだ。

「よ…しよし、もう大丈夫だよ」

「やめろ。おめーらは、顔コエーんだから」

「へ…へイ若…」

「よかった…無事で」

「当たり前だろ、俺がいるだから」

光輝は、少年の正体が誰か、わかったらしい。

「そうだったな…。」

カナちゃん、怖いから目つぶってな」

そのまま少年はガゴゼへ向かう。

「…？誰……？」

カナにとっては、誰なのかわからない。

「…おにいさま、あの少年は、もしかして…。」

「ああ、若頭だよ」

「ちっぴり」

有紀と光輝が会話している最中に、どっさりリクオはガゴゼの元に
着いたらしい。

「私は…ただ人間のガキ供を襲っていた…それだけが…？
何の…問題もないはずだろう…」

「ガ…ガゴゼ…!!」

ガゴゼはあくまでシラを切ろうとしていた。

「子供を殺して大物ヅラか」

「!？」

「オレを抹殺し、三代目を我がモノにしようとしたんなら…
ガゴゼよ、てめえは本当に…小せえ妖怪だぜ」

少年　　リクオは、言い切る。

「なんだあゝ貴様は」

「!？待て…その方は」

木魚達磨が止めの声を出す。

だが、ガゴゼの手下の手が触れることはなかった。

「リクオ様には一歩も近付かせん。

ガゴゼ会の死屍妖怪どもよ…」

「てめ…」

「！なつ…！？」

止めていたのは、首無だった。

「絡新婦せむしめがねの糸と毛倡妓けごの髪をよってあわせた特製の糸だ。
動けばさらにしめる！」

「なめるなああ」

首無の警告を無視して動く。ゆえに

「ああああ…」

糸によって殺られた。

「な……」

「じいじら……」

「こいつがリクオ……だと……？
生きていたのか……お……おのれ……
くそっ……！！殺せ！！この場で……若を殺せ！！
ぬるま湯にそまつた本家のクソどももろとも！！全滅させてしまえ
！！！」

「若！！！」

「力仕事は……」

「突撃隊長、青田坊にまかせてもらおう……か！！！」

「貴様一人ではないぞ、突撃隊長は……っ！！！」

「な……」

次第にガゴゼ会の者は殺られ、ガゴゼ一人となった。

「こ…こんなバカな…」。

私の組が…そんな…誰よりも…殺してきた…最強軍団なのに…」

「ガゴゼ。妖怪の主になろうってモンが

人間、いくら殺したからって…自慢になんのかい」

「う…」

「あきらめろ。この企み……指つめどころじゃすまされんぜ」

「く…。ん？」

ガゴゼの目がカナたちに行った。

カナたちも、ハッとなった。

「！？何っ…」

「フハハハハハ。ザマあ見ろ！！」

こいつらを殺すぞ！？若の友人だろ！？殺されたくなければオレを
…」

「キャアアアア」

「……………」

光輝と有紀は、ガゴゼを哀れな目で見た。だって、そこにはすでに
…。

リクオがガゴゼの顔にドスを斬りつけた。

「ヒイイイイイイ」

「若！？」

リクオの行動に、本家の妖怪たちも驚き声を上げた。

「なんで…なんで…貴様のようなガキに…ワシの…ワシのどこがダ
メなんだ…！？」

リクオが斬りつけたところを、ガゴゼは痛い、痛いと言っている。

「妖怪の誰よりも恐れられてるといふのに……！……！……！」

ガゴゼはそう言う。

「……」

「……おにいさま？」

「ユキ、ホントの“恐れ”という意味が何か、わかるよ」

リクオが言う。

「子を貪り喰う妖怪……そらあ、おそろしいさ……」。

「ただどな……弱えもん殺して悦にひたってる、そんな妖怪がこの闇の世界で一番の“おそれ”になれるはずがねえ」

「……！」

「情けねえ……こんなばっかかオレの下僕しもべの妖怪どもは……！」

だったら！！オレが三代目を継いでやらあ！！
人にあだなすような奴あ、オレが絶対ゆるさねえ」

「若……」

「ひい~~~~いやだ~~~~」

「世の妖怪どもに告げる。オレが魑魅魍魎の主となる！！
全ての妖怪は、オレの後ろで百鬼夜行の群れとなれ」

リクオはガゴゼを真っ二つに斬った。

「ガ……」

「畏」

その文字は

普通ではない者

「鬼」が「ト（むち）」を持つ

という意味の字

それはすなわち

未知なるものへの“感情”

「妖怪」そのものを表す

ガゴゼのような悪行も「恐れ」

巨大なモノに対する「おそ聳れ」

脅迫に対する「おそ恐れ」

支配に怯えるのも「おそ懼れ」

だが

それは妖怪の一面に過ぎない

「すげえ…あんな小さいのに…」

「カツコイイ…」

「妖怪つて…本当にいたんだ。あんなスゴイんだ…」

三人は呆然と吐く。

「この達磨…知っていたながら、今気付いた」

闇世界の主とは

人々に畏敬の念さえも抱かせる

真の畏れをまとう者であると

「さあ、ユキ。帰るか」

「そうだね」

その後、本家の妖怪たちの悲鳴が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2036ba/>

妖の世界 女主人公側

2012年1月6日14時46分発行